

文化情報学部におけるアーカイブズ分野の専攻科目

波多野 宏 之

はじめに

学部理念、学科、コースの変遷等の全般については別稿で言及されているので、本稿ではアーカイブズ分野のコースについて、その特色、履修目標および専攻科目の変遷について略述する。

1. 学部草創期（1994年度～）

文化情報学部知識情報学科レコード・アーカイブズコースでは、3・4年で履修する専攻科目として下記の科目が配置されている。

記録管理論、オフィス・マネジメント論、史料管理論、企業記録論、行政記録論、組織記憶論、記録媒体修復論、記録媒体複製論、文化環境設計論、環境芸術論の計10科目各2単位が設定され、これらの中から12単位以上取得することが必須とされた。専攻科目群としては、これらほかに関連する知識コミュニケーションコースの専攻科目（情報資料論等図書館情報学関連の10科目）からも取得可能で、ほかに演習科目としてゼミナールⅠ（3年次 必修）、ゼミナールⅡ（4年次 必修）、卒業論文（4年次）があり、さらに副専攻科目12科目からも取得して専攻科目群の必要取得単位数40単位に算入することができた。

『履修ガイド』では、「人類の知的・組織的活動の成果は、文字による言葉の記録として歴史的に累積され、この膨大な知識記録の集積の上に、現在における人類の知的文化活動が展開され、未来へ向けて人類が新たな可能性を拓くためのかけがいのない情報資源として考えられる。この文字記録としての情

報資源を、知的活動の成果に着目したのがレコード・アーカイブズコースである。[太字は原文ママ]とし、その特色・履修目標として、専攻科目は「業務に応じて、業務遂行のための組織行動に伴って生ずる言葉や文字による記録資料の情報資源は、利用目的に応じて整理・保存し、その情報資源を体系的に統制を加えることが必要である。そこでこれらの情報資料の特性を明らかにするために、種々の媒体(文書・フロッピー・フィルム等)による記録の作成、流通、蓄積、検索に関する科目として、『組織記憶論』、『記録管理論』、『企業記録論』、『行政記録論』等を、また、記録の保存等の手続、管理等に関する科目として『オフィス・マネジメント論』を配置している。」と記されている。

2. 新カリキュラム（1998年度～）

ここでは専攻科目として従来2科目に分かれていた記録媒体修復論と記録媒体複製論が記録媒体修復・複製論として1科目に統合されたほか、副専攻科目の位置づけであった歴史資料論Ⅰ、歴史資料論Ⅱ、古書体講読Ⅰ、古書体講読Ⅱなどが専攻科目となっているほか、検索サービス論、参考調査論、産業考古学が加わり、計16科目となった。(卒業要件は10単位以上)なお、専攻科目群40単位以上という卒業要件は変わらないが、この中には、従来の知識コミュニケーションコースの専門科目のほか文化情報学科の専攻科目(4科目8単位)および他学部科目(8単位)も含むことができるようになるなど、選択の幅が広がったことが特徴である。

3. 新カリキュラム (2001年度～)

知識情報学科のコース分けとして、知識コミュニケーションコースは従来通りであるが、他の2コースがアーカイブコースと情報管理システムコースとなった。「アーカイブコース」について『履修ガイド』では、「これまで社会の中で生み出されてきた記録情報、映像情報、音響情報、資料(モノ)情報あるいはそれらが複合した情報を効率的に蓄積し、利用者へ提供するための技術や知識を習得します。」として、文字記録を扱うアーカイブという従来の枠組みとは異なる切り口からコースを組み立て、新たに「このアーカイブの概念はインターネットの普及とともに広がりを見せています。同時に、情報のネット上での公開や世界規模での共有化の流れが加速しているなか、その在り方も変化しています。ネット上では情報の創造者が同時に情報の提供者にも管理者にもなり得るからです。アーカイブコースでは、伝統的なアーカイブとともに、ネット社会にも対応できるアーカイブの仕組みを学びます。」と説明している。

実際、アーカイブコースには新たに文化情報学科の専攻科目であった音響アーカイブ論、映像アーカイブ論などが移行してきたほか、博物館・文書館ドキュメンテーション、博物館資料論、博物館実習が置かれることになった。ほかには、専門科目ではデジタル・アーカイブ論、歴史コンピューティングが加わって、従来の史料管理論、歴史資料論、産業文化遺産論、古書体講読、記録媒体修復・保存論と外国大学科目を合わせて計13科目が配置された。他方、従来の記録管理論、オフィス・マネジメント論、企業記録論、組織記憶論は情報管理システムコースの専攻科目に含まれることとなった。

4. 新カリキュラム (2006年度～)

2006年度より、学部の学科、コースの編成が大きく変化した。すなわち、文化情報学科とメディア情報学科に分け、前者に観光サービスコース、図書

館情報メディアコース、アート&アーカイブズコース、後者に映像音響メディアコース、情報デザインコースが配置された。従来のアーカイブコースは、知識情報学科から文化情報学科に移るとともに、名称をアート&アーカイブズコースと変えたわけである。『履修ガイド』におけるこのコースの特色・履修目標には「重要記録を保存活用し、未来に伝達する<アーカイブズ>の役割を、現代社会、特に地域の活性化の重要な要素でもある<アート>とともに学びます。アーカイブズは情報創造には必要不可欠のものであります。創造された情報は蓄積され活用されることによって、さらに新たな情報の創造につながるからです。このアーカイブズ概念はインターネットの普及とともに広がりを見せており、それに対応して、このコースでは、文化財などのデジタル・アーカイブズ化や記録文書の電子化も取り上げていきます。アーキビストやアート関係情報専門職、学芸員などを指すものに相応しいコースです。」と説明し、従来より具体的な進路イメージを描いている。専攻科目は、主専攻科目と名称を変えた。そこに配置された科目は、従前と大きく変わるものではないが、アート系の科目が表現上、増えている。表現上というのは、新たにおかれたアート・ドキュメンテーションは、博物館・文書館ドキュメンテーションを引き継ぐものであり、芸術経営論は、学部基幹科目からの移行であるから、実質的にアート系科目が増えたわけではない。また、多くの科目が名称変更を行い、アーカイブズ学は史料管理論を、歴史とコンピュータは歴史コンピューティング論を、また古書体と古文書は古書体講読を引き継ぐものである。また、電子文書と記録管理は、従来、情報管理システムコースにおかれた電子記録システム論を引き継いだ。逆に主専攻科目から除かれたのは、音響アーカイブ論、映像アーカイブ論、歴史資料論、産業文化遺産論である。博物館資料論に代わり博物館情報学が入り、記録媒体修復・複製論は保存修復演習として主専攻に残り、別に学部基幹科目として記録媒体保存論が置かれた。今回のカリキュラム改革では、インターンシップA、キャリアディベロップメン

トが主専攻科目に入っており、計 13 科目で数の上では従来と同数である。

おわりに

2009 年度より学部名称をメディア情報学部とするとともにメディア情報学科の単一学科となり、アーカイブズ分野は、従来の図書館情報メディアコースと合体して図書館・アーカイブズコースとなって今日に至っている。

上にみたようなコース編成の揺れは、新たな学問体系としての文化情報学の生みの苦しみの表れのひとつでもあったように思われる。科目の設定についても同様で、例えば「文字記録としての情報資源」を扱うコースとしてレコード・アーカイブズコースの専攻科目の中にあって「文化環境設計論」と「環境芸術論」が異質であった。前者は、文化施設の設計、都市計画、劇場・ホールを中心とした施設の運営などを内容としているが、これら施設における資料収集やアーカイブズも扱っており、専攻科目に組み込まれたものと思われる。後者は現代社会における自然環境や社会環境の変化が文化芸術に与える影

響をヒューマン・エコロジーの観点から考察し、建築、音楽、演劇等を含む幅広い環境芸術の実際を、とりわけ光や音響、先端技術の関係などを扱っている。ともに学部理念から見ても重要な領域を扱っているが「文字情報」を扱うこのコースの専攻科目としてはやや奇異な感を受ける。2001 年のカリキュラム改革では、前者は学部基幹科目へ、後者は映像・音響情報コースの専攻科目へ移行しており、妥当な配置となったと言ってよからう。

このように、コース編成の揺れとともにかなり複雑に科目の変遷を見ているので担当教員も多岐にわたるが、主としてこの分野にかかわりが深かったのは、文化情報学の理念、とりわけ記録管理・アーカイブズ関連領域の教育・研究の振興に努めた安澤秀一、原田三朗（敬称略。以下同様）である。学部創設当初から専任教員として広瀬順昭、保坂裕興、村越一哲が、客員として立木定彦、壺阪龍哉が携わった。なお、後年、筆者も一端を担った。

参考文献

『文化情報学部履修ガイド』1994 - 2006 年度